

おちんとす

くちづさむ我がうたふるびわれやせぬかくて我世

の暮れ杲ん哉

○ 八重子

秋のあめ細うふる夜をともなくしづかにかもふ  
あめつちの歌

○ 伊藤芳江

額ふして祈りさゝぐるわさわけや靈の香はなつし  
らぎくのはな

○ 金丸錦川

あしの花白うふけたる霜の夜を名しらぬ鳥のきた  
に鳴きすぐ

○ 志雅子

許しませこの身はやせてさまよひの塵のちまたに  
うたもだになき

○ ○ ○ ○ ○

フレーベル會俳句端書集

一、課題 當季雜吟一人十句以下

一、締切 毎月二十五日限り

一、披露 翌々月本誌上

一、賞品 三光には繪はがきを呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌 購讀者は何人にも投吟する事

を得用紙は繪葉書に限り（眞筆刷物隨

意）住所氏名雅號を明記し必らず左の

名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛



人、歌讀まじ人とは見へず大根引 東京ゆかり子

追加

鹽野奇零

益良雄も太刀解きて屠蘇の膳  
敵味方先づ打ちとけて御慶かな  
凱旋に國威の高し初日影

漁夫

雨峯生

夕ゆふ日ひくまなく影いろうどりし  
影かげ流ながしゆく鳥川からすかわ  
長ながき影かげをば地に描えがき  
家路いへちに向むかふ思おもひこそ  
細ほそき煙けむりは釣つりり糸いとの  
浮世うきよの波なみはしづかにて  
例たとは峰みねの白雲しらぐもの  
洞ほら口くちにかへるそれなるか  
芥子けし生おえゆきて限かぎりなき  
無心むしんといへどひたすらに  
莫實このみを結むすぶ道理ことばりを

毛武もうぶの峰みねの濃こほら紫むらさき

岸きしをたどれる漁夫ぎよひと一人

俚歌うたにわか身をまかせつ、

げに「詩しの使つかひ」歌うたの神かみ」

それにも似にたる生活せいごも

今日けふもくれたる樂たのしさを

無心むしんながらに湧わきたちて

無心むしんといへどひたすらに

莫實このみを結むすぶ道理ことばりを

芥子けし生おえゆきて限かぎりなき

無邊つぎぬて天地ちちの擴ひろかりん

柴しばの破垣やれがき、妻つまもなき

たゞ「自然しぜん」のふところ

深ふかき蕙ゆづりなことほかん

四邊あたりはやゝに冷雲ひやうくもの

しづかに岸邊きしべさすりゆき

礙まはりなき身みはすがくと

觀喜くわんぎの光ひかり眉まゆにみゆ

通かよふ運命さだめと思おもひ出ひで

我家わがやわびしき獨住ひびす居る

願いのふ幸さいこそ天地あめつちの

今日けふはくれぬくれはてぬ

翼つばひきたりて川水かみづは

音ねも淋さびしくなりぬれど

あがきもはやくなりゆきて

話うたふ小うたの音ねもやみて

雪の夕べ

胡山山人

浮世うきよの塵ちりをしばしだに

清きよめんものと久方ひさかたの

天あまつ御空みそらを立ち出いで、

雪ゆきは下界げがいにくだり來きぬ。

清きよき心を白妙はくめうの

色いろに見みせつ、野邊山のべさんへ

塵ちりのちまたもいとひなく